

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

A Study of Identity, Aesthetics and Politics in Sinophone Malaysian Cinema since the 2000' s
(2000 年以降の華語語系マレーシア映画におけるアイデンティティ、美学、政治)

氏 名

周 蔚延

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、マレーシアの社会歴史的および政治的文脈に関連して、2000 年以降の現代の華語語系のマレーシア映画について、理論的枠組みとして華語語系（サイノフォン）概念を使用し、ディアスポラ、アクセント映画概念と組み合わせて、研究したものである。

本研究は 4 つの側面に焦点を当てている。まず、華語語系のマレーシアの映画製作者による自身のアイデンティティの明確化と、映画を通じてアイデンティティの問題にどのように対処しているかを調査した。次に、テキスト分析により、映画の物語と美学を通して描かれているマレーシアの華語語系コミュニティと他の民族グループの文化と経験を分析した。そして、マレーシア内の華語語系映画の制作と配給の過程は、トランスナショナリズムとグローバリゼーションの言説において、マレーシアの境界を超えたさまざまな華語語系のコミュニティを循環している現象を検討した。最後に、マレーシアの華語語系映画と他の華語語系地域の映画との相互関係を研究することにより、華語語系概念を補完する概念としてのディアスポラ研究、アクセント映画研究、少数派（マイノリティ）およびコスモポリタニズムなどにどのように貢献しえるかについて述べた。

本稿は 5 つの章から成る。第 1 章では、「君はずっといる（一路有你）」（2014 年）と「オラ・ボラ（Ola Bola）」（2016 年）の 2 本の映画を調査対象とし、華語語系の映画製作者であるチウ・ケングアン（周青元）がマレーシアで生活する華人に華語語系映画をみてもらうための方略として、「華人性」をどのように採用しているか、そして彼が映画で描いた多文化主義と調和のとれた民族関係は実際には「想像上の国家」であるという神話をどのように暴くかに焦点を当て筆者の考察を述べる。

第 2 章では、ザヒルオマールの「非常盗/Fly By Night」（2018 年）、リュウ・セン

タット（劉成達）の「世界を救った男たち」（2014年）とアドリアン・テイ（鄭建国）の「パスカル」（2018年）を調査対象として、マレー語の映画を制作する華人系の映画製作者と華語語系の映画を製作するマレー系の映画製作者の相互関係について述べる。

第3章では、台湾を拠点とするマレーシアの華人系の映画製作者ラウ・ケクフアット（廖克發）の「不即不離—マラヤ共産党員だった祖父の思い出—」（2016年）、「斧は忘れても、木は覚えている」（2016年）と「ボルオミ（菠蘿蜜）」（2019年）三部作の中に描かれているマラヤ共産党、民族暴動、少数民族、およびマレー系の人々に与えられた特別な権利などのテーマについて、筆者の分析を述べる。

第4章では、マレーシアの独立系映画製作業界の開拓者の一人として、女性の映画製作者であるタン・チュイムイ（陳翠梅）の作品「愛は全てに打ち勝つ

（愛征服一切/Love Conquers All）」（2006年）と「南からの手紙（南方來的信）」（2013年）を対象として、社会政治的、歴史的、経済的、グローバリゼーションの文脈に関連する美学と映画撮影術（シネマトグラフィー）に関する分析を述べる。

第5章では、コスモポリタニズム概念を使用し、2人の華語語系の映画製作者、エドモンド・楊とネームウィー（黃明志）の経歴と作品を分析する。まずはじめに、楊がアジアの周辺から中心部までの国境を越えた経験と、局地化とグローバリゼーションの文脈に関連して、彼の短編映画数本と長編映画「アケラット-ロヒンギヤの祈り」（2017年）について、筆者の分析を述べる。次に、「ナシレマ 2.0」（2011年）とバングラシア（2013年）を対象として、映画の中のローカライズ要素、多文化主義、文化的ハイブリッドの表現を分析し、ネームウィーがこの二本の映画を通じてどのようにマレー優先のナショナリズムと「中国中心主義」同時に異議を唱えることに焦点を当て筆者の分析を述べる。

キーワード：華語語系研究、マレーシア映画、華人性、アイデンティティ政治、ディアスポラ研究、アクセント映画研究